

宗教運動の類型化 1

黒川 知文

Tomobumi KUROKAWA

(史学教室)

序一宗教運動の類型

宗教や文化的運動を類型化する試みは、これまで主として欧米においてなされてきている。それは、人類学、社会学そして歴史学からのアプローチに分けることができる。

人類学的アプローチとしては、リントン(R. Rinton)が自文化運動の概念を用いて類型化を提起した。⁽¹⁾自文化運動とは、社会の成員が文化のある面を復活させるか、もしくは永続させようとする意識的・組織的な運動のことであり、黙示的・千年王国の側面を具体的に表現したものである。この運動においては、待望する至福の世が直接過去にもとづいて構築されており、また、新しい文化要素が呪術的自文化運動との関連のなかで現出しているとされている。リントンは以下の4類型を提起した。

- ① 復活的—呪術的運動
- ② 復活的—合理的運動
- ③ 永続的—呪術的運動
- ④ 永続的—合理的運動

ワラス(A. F. C. Wallace)はさらに、再生運動という概念を設定した。⁽²⁾これは、より満足のいく文化を構築するために社会の成員によりなされる慎重でかつ意識的な運動のことであり、再生運動は、社会の成員の高度のストレスと歪められた文化形態への幻滅により発生するとされた。ワラスは再生運動の展開段階を以下の5段階に類型化している。

- ① 均衡状態期
- ② 個人的ストレスの状態期
- ③ 文化の歪曲期
- ④ 再生運動期
- ⑤ 新たな均衡状態期

このように、リントンの自文化運動にもワラスの再生運動にも宗教は文化の一部としてとりあげられているにすぎない。

現代社会における政治・社会・宗教制度の変動に強調をおく社会的アプローチとしてはスメルサー(N. J. Smelser)の集団行動の研究があげられる。

スメルサーによれば、集団行動は以下の5類型に分けられる。⁽³⁾

- ① 恐怖のパニック
- ② 熱狂的反応
- ③ 敵意噴出行動
- ④ 規範志向運動
- ⑤ 価値志向運動

これらのうち④規範志向運動は、脅威を受けている現在の社会的規範を規範志向的信念にもとづいて規範の復興・防衛・変革・創造しようとする試みである。また、⑤価値志向運動は、脅威を受けている価値体系を復興・防衛・変革・創造しようとする価値志向信念による試みである。

これら5類型の具体例は以下となる。

- ①：火災発生時のパニック
- ②：気紛れの流行 投資ブーム 宗教復興運動
- ③：騒動 暴動 叛逆 叛乱 革命
- ④：社会改革運動
- ⑤：自文化運動 千年王国運動 ユートピア運動
セクト形成 宗教改革 政治革命・民族主義運動 カリスマ的運動

スメルサーの集団行動の類型のなかで、宗教が関わるのは、②熱狂的反応と⑤価値志向運動とになる。スメルサーは集団行動全般をみつかったために、宗教はその部分にすぎなくなったといえる。

歴史的アプローチにおいて、宗教運動が対象とされるにいたっている。たとえば、タルモン(Yonina Talmon)は、千年王国運動は近代革命運動の原型であったと指摘している。⁽⁴⁾また、宗教運動を発生史的に論ずる試みは、ドーソン(C. A. Dawson)とゲティス(W. E. Gettys)によりなされている。彼らは宗教運動を以下の4段階において論じている。⁽⁵⁾

- ① 社会的不安の段階
- ② 集合興奮の段階
- ③ 形式化の段階
- ④ 制度化の段階

このように、歴史的アプローチにおいてはじめて、宗教運動を対象とした類型研究がなされ始めたと言える

る。しかしそれはまだ発生論的な類型化にすぎない。したがって、全世界史的に展開した個々の宗教運動が分析対象となっていないために、不完全な類型化研究といわざるをえない。

著者はこれまでユダヤ教とロシア正教に関する歴史研究をしてきた。⁽⁶⁾それらを基にして世界史において展開した個々の宗教運動を分析対象とする宗教運動の類型を設定する。それは以下のように宗教運動自体を発生論的に類型化したものである。

- ① 宗教生成運動
- ② 宗教発展運動
- ③ 宗教対抗運動
- ④ 宗教迫害運動
- ⑤ 宗教衰退運動
- ⑥ 宗教復興運動

①は、特定宗教が生成するにいたる運動であり、教祖中心型か教義中心型か、創始的なものか伝統的なものかなどから分類される。

②は、宗教を発展させる運動である。それは、彼岸的か此岸的か、個人的か集団的か、地方中心か都市中心か、世襲化したものか師弟関係で継承されたものか、民族的か普遍的か、土着文化への同化の程度はどのようなものか、などにより分類される。

③は、他宗教と対抗する運動である。いかなる点で他宗教に対抗し、またいかなる対抗をしたのかによって特徴づけられる。西欧中世におけるキリスト教とユダヤ教との間で開かれた公開討論、カトリック教会による反宗教改革などがこの具体例となる。

④は、その宗教に対する外部からの迫害運動である。迫害は、差別、中傷、暴動、虐殺などの形態をとる。宗教迫害の形態は宗教により異なる。

この宗教迫害を克服した宗教は円熟期を迎える。宗教を中心とした共同体を形成して支配構造も確立していく。宗教にもとづく価値観も統一されて理想的段階を迎える。しかし円熟期は一時的である。永続する円熟期を迎えた宗教運動は存在しない。かならずそれは衰退期を経験する。宗教は永遠を教えるが宗教運動は永遠を経験しない。運動の主体が人であるために、衰退するのが宗教運動の運命である。

⑤は、宗教が何らかの理由によって衰退していく運動のことである。外部勢力からの征服、改宗、解散命令、内部からの異端の発生、分裂、などがその理由となる。今日のオウム真理教は解散命令により衰退運動の段階にはいつている。古代ローマ帝国がゲルマン民族の移住により崩壊しつつあった時に滅亡した諸宗教、中世から近代にかけて多くのセクトに分かれて消滅していったロシアの分離派の末裔、これらが具体例となる。

⑥は、衰退したかに見えた宗教が再び活力を帯びてくる運動である。これには、宗教改革や米国のニューイングランド大覚醒運動、ドイツ敬虔主義の運動や北欧で展開したフリーチャーチ運動が具体例となる。

あらゆる宗教がこれら6つの運動を経験するわけではない。(図1参照) 発展しないで衰退した宗教運動。宗教迫害により衰退した宗教。迫害を克服して円熟期を迎えたが衰退した宗教運動。一度衰退したが復興した宗教運動や二度と復興しなかった宗教運動。さらには何度も復興した宗教運動。これらの形態を実際にはとる。

宗教運動の類型化考察により、宗教自体の本質的構造をわれわれは理解することになるであろう。

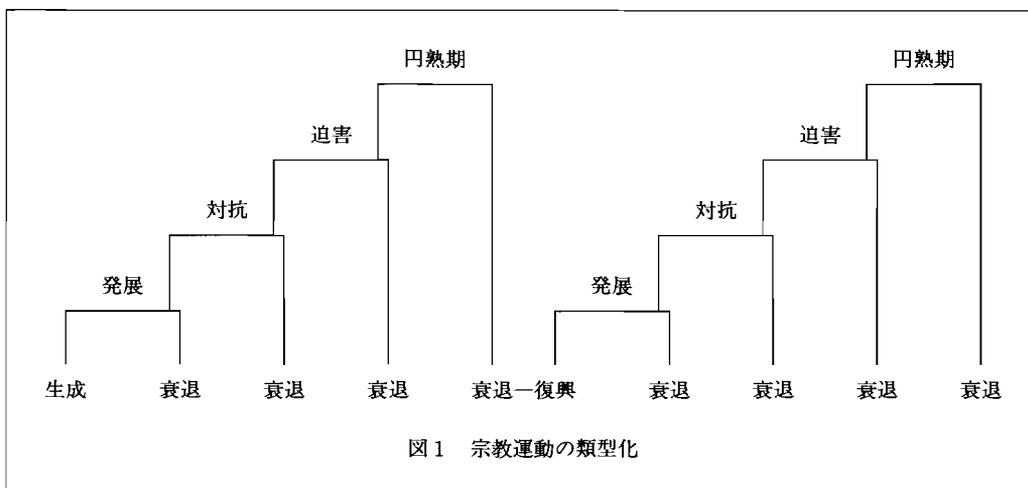


図1 宗教運動の類型化

1. 宗教迫害運動—ユダヤ教—

宗教迫害運動の類型化の基礎となるのはユダヤ教における迫害運動である。ユダヤ教徒は古代から現代にいたるまで迫害を経験してきた。⁷⁾

古代においては、セレウコス朝支配下におけるアンティオコス・エピファネスによる迫害と、古代ローマ帝国支配下における迫害があった。

中世においては、十字軍運動の際におけるユダヤ人虐殺、黒死病の責任を問われた虐殺が発生した。

スペインにおいては、15世紀におけるユダヤ人追放令前後において迫害が頻発した。

近代ロシアにおいては、19世紀末から20世紀初頭にかけて3次にわたり発生したポグロムが挙げられる。

近現代ドイツにおいては、ナチス・ドイツによるホロコースト、近代フランスにおいては、ドレフュス事件が象徴的なユダヤ人迫害事件といえる。

近代イギリスにおいては、南ウェールズにおける反ユダヤ暴動事件、そして米国においては、レオ・フランク事件がユダヤ人迫害事件として挙げることができる。

ユダヤ人迫害は、基本的には欧米における現象であ

る。それは時代によっても地域によっても様々な原因があった。

第1には、宗教的原因がある。これには、ユダヤ教に対する違和感と「キリスト殺し」のユダヤ人というイメージより展開されるキリスト教からの敵意とがある。

第2には、経済的原因が指摘できる。ユダヤ人の経済活動に対する嫉妬、そして、ユダヤ人と競合した際においてもたれた憎悪とがあった。

第3には、民族主義の台頭にもなう「異人種としての」ユダヤ人に対する敵意が原因となっている。これには東欧系ユダヤ人に対してもたれた型と人種理論にもとづく西欧ユダヤ人に対する型とがある。

第4には、政治的原因があげられる。これには、権力掌握の道具としてユダヤ人迫害を利用した型と、敵に対する憎悪を高揚するためにユダヤ人を利用した型とがある。

第5には、社会的原因がある。民衆の不満を無関係のユダヤ人に向けさせる「犠牲の羊」としてのユダヤ人に対する迫害の型である。

迫害時期・場所	迫害事件	迫害の程度	迫害の原因	繁栄の程度	同化の程度	メシア思想	メシア運動
古代ヘレニズム朝	エピファネスの迫害	◎	宗教	○	△	△	×
古代ローマ帝国	ユダヤ人への圧制	◎	独立 宗教	○	△	◎	◎
中世西洋	十字軍による迫害	◎	宗教	△	×	○	×
中世西洋	黒死病の責任	◎	宗教	○	×	○	×
中世後期スペイン	ユダヤ人追放令	◎	経済 宗教	◎	◎	◎	◎
近代ロシア	ポグロム	◎	経済 政治	○	×	◎	◎
近現代ドイツ	ホロコースト	◎	政治 経済	◎	◎	×	×
近代フランス	ドレフュス事件	△	政治	◎	◎	×	×
近代イギリス	南ウェールズ暴動	×	経済	◎	◎	×	×
近代米国	レオ・フランク事件	×	経済	◎	◎	×	×

図2 ユダヤ人迫害運動の周辺

ユダヤ人迫害運動は、これら5つの原因が複雑に絡み合って生じたものといえることができる。

ところで、ユダヤ人迫害前後に発生した社会状況と迫害との関係を検討すると以下のことが指摘できる。それは、ユダヤ人の繁栄と迫害とメシア運動という3つの事象には相互に関係があることである。すなわち、メシア運動は、過去において繁栄した状況があり、それが迫害により破壊されて、メシア思想もしくは神秘思想にもとづくメシア運動が展開したということである。

繁栄した過去があった。それが迫害によって崩れてしまった。そして現在の苦難の中にあり恵まれていた過去にもどりたいという過去への回帰情念がメシアに

よる解放の希望となりメシア運動が展開していった。

(図3参照)

この図式は、具体的にはローマ帝国の支配下においてハスモン国家の恵まれた過去への回帰情念をもつユダヤ人が2度の叛乱をメシア運動として展開したことにあてはまる。また、中世後期のスペイン系ユダヤ人にも当てはまる。スペインのユダヤ人は、貴族階級へも進出するほど恵まれた地位にいたが、迫害と追放によりすべてが崩壊して地中海沿岸地方に放浪せざるをえなくなった。彼らの多くは恵まれた過去への回帰情念を抱き、それがシャブタイ・ツウィ運動を頂点とするメシア運動の発生へとつながっていった。さらに東欧におけるメシア運動としてのハシディズム運動に

も、恵まれた過去と現在の苦難と迫害、そしてツァディクをメシアとする思想が指摘される。

西欧中世において、迫害とメシア思想はあったが、回帰すべき恵まれた過去はなかった。したがって、メシア運動として結実することはなかった。

近代ドイツにおいてユダヤ人はドイツに同化してあらゆる分野に進出して繁栄していた。しかし、ナチス・ドイツによる迫害が突如として開始された。恵まれた過去の繁栄と現在の迫害はあったが、改革主義ユダヤ教の教えにはメシア思想はなかった。

このように、繁栄と迫害とメシア運動は、ユダヤ史にみられる普遍的な型ということが出来る。

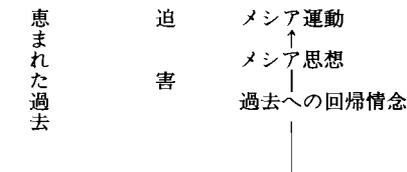


図3 メシア運動への展開図

註

- (1) Linton, R., "Nativistic Movement", *American Anthropologist*, Vol. 45, 1945. を参照
- (2) Wallace, A. F. C., "Revitalization", *op. cit.*, LYIII, 1956. を参照
- (3) Smelser, N. J., *Theory of Collective Behavior*, New York, 1963. を参照。
- (4) Talmon, Y., "Pursuit of the Millennium", Barry, M. ed., *Studies in Social Movements*, New York, 1969. を参照。
- (5) Dawson, C. A. & Gettys, W. E., *The Religious Movements*, New York, 1975. を参照。
- (6) 拙著『ロシア社会とユダヤ人』ヨルダン社, 1996年, 『ユダヤ人迫害史』教文館, 1997年を参照。

(平成9年9月11日受理)